

## 紙つぶて

人間は自然の恵みを受け、また厳しさと対峙しながら生きる。野生動物が強者と弱者、食物と毒物を見分けるように、自然探求は人間の本能。子どもは誰でも科学者、大人になっても科学者でいられるかが問題だ。太古から太陽や月、星を眺めてきた。雨や雪に触れ、

## センス・オブ・ワンダー のより りょうじ 野依 良治

木の実を採り、蛇やカエル、虫を捕まえた。貧困、不便な生活と引き換えに、自然から多くを学んだ。

やがて神戸へ帰ると弟たちと家事を手伝った。炊事、風呂たぎ、ゴミ焼却、掃除、大工仕事。木材を利用し、かんな、のこぎり、のみ、金づち、くぎやねじを使っての工作には、力学、幾何学の生きた知識が求められた。暖房は炭火を使った火鉢やこたつで、技術的な工夫がある。

川、海を見つめ、動植物に出会う。五感を生かして物事を知り、驚き、納得する。レイチェル・カーソンのいう「センス・オブ・ワンダー」、この自然の実感こそが八十年を生きる糧となる。

大戦末期の小学一年時に田舎に暮らした。衣料や燃料、食料はすべて自給自足。野菜づくり、田植え、麦ふみ、芋掘り、柿の実採り、クリ拾い、マツタケ狩り…。魚釣り、スズメ捕り、鶏の世話…。友達と山菜や

これらは本物の理科の実習。理屈で説明できなくても体験で習得できる「暗黙知」の宝庫だった。学校や塾で教える論理的に整理された「形式知」では補えない知恵を育てる。現代人は人工都市に住み、あえて安楽で効率優先の生活様式を選択した。それが人間本来の感性を劣化させているように思えてならない。(理化学研究所理事長)